

# 焼津市花沢地区の歴史的街並み保全と地域コミュニティの活性化デザイン

静岡文化芸術大学 文化政策学部

文明観光学コース 石本ゼミ

指導教員：非常勤講師 石本東生（國學院大學研究開発推進機構教授）

参加学生：新井慶、安藤江梨花、河守詠人、横山菜々実

## 1 要約

本研究は、現地フィールドワーク（以下、FW）により焼津市花沢集落の景観整備の特徴を明らかにし、また地域住民および花沢の里・重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建）を所管する焼津市歴史民俗資料館への聞き取りを通し、同地区のコミュニティが直面する課題などを整理した。また、焼津市歴史民俗資料館の学芸員の方によるご講演やご指導、加えて焼津市の調査報告書「花沢の民俗」の読み込みを行い、その都度、理解点、疑問点の整理を行った。そして同資料館との連携に基づき、二度の現地FW、聞き取り調査から「花沢の里」の現状を明らかにし、得た情報をもとに同重伝建のさらなる保存と活用を展望した。



写真 1)花沢集落の遠景

## 2 研究の目的

静岡県内で唯一、重伝建に選定されている焼津市花沢集落。現在、国内における重伝建は 126 か所存在するが、その中には歴史的町並み景観の「保存」と「活用」とのジレンマに苦悩している地域も少なくない。また、少子高齢化の影響や空き家の管理も悩ましい課題である。一方で、稀有な歴史的町並みを観光資源として活かし、観光誘客による社会経済的な活性化を現実のものとしている地域も存在する。

本研究の目的は、焼津市花沢集落が静かな山里の居住地域である性格から、歴史的景観を保護しつつも、積極的な観光地化ではなく緩やかな交流人口や関係人口を徐々に増やすなど、将来的にも持続可能なまちづくりの施策となりうる提案を作成することである。

## 3 研究の内容

令和 3 年 5 月に焼津市歴史民俗資料館学芸員の方からご講演を頂いた。「花沢の里」（以下、花沢）は、静岡県焼津市の北の山間部にある江戸時代以来の山村集落である。山間部でありながら市街地と非常に近い場所に位置していることが特徴の一つである。そのため昼間は働きに出られるので、住民主体でこの地区を守るために観光という手法を用い、集落を途絶えさせないようにするといった動きは少ない。

次に、花沢における「重伝建」選定までの流れを順に説明する。花沢は平成の早い段階で文化庁から伝建地区指定の話を受けていたが進まず、平成 16 年に歴史的な景観保護に危機感を覚えた市が伝建制度に基づいたまちづくりを提案し、伝建指定を目指すことになった。指定までには住民発起の活動に市が便乗する形で行われることが多いが、市の提案に住民が便乗した花沢では調査が難航し、2 年を要した。調査終了後、5 年ほどのブランクを経た平成 24 年度に伝建制度に基

づいてまちづくりを進めるか否かの意見を取ったところ、住民全員賛成で進めることになった。しかし、担当者によると当時の賛成は総論賛成で各論反対であり、住民個人の意見は様々あるという。伝建指定までの手続きを終え、平成 26 年には静岡県で初めて、国の「重要伝統的建造物群保存群保存地区」の選定を受けた。

令和 3 年 11 月に行った一度目の FW では、花沢集落全体の見学を行った。現地ではやはり焼津市歴史民俗資料館学芸員の方による、主に建造物や伝建に伴う事象についてのご解説をいただいた。花沢の特徴的な石畳は耐震のため現在調査中で、耐震対策のためにはコンクリートにすることで解決することが可能だが、伝建地区では困難であるという。

花沢の入り口付近にはビジターセンターがあり、昔は半壊していた建造物を修復し、現在のよりに活用されている。修復は出来るだけ元の素材を使用した「矧木」(はぎき)という技術が用いられ、花沢内の寺院である法華寺も同様の技術での修復が行われていた。法華寺では屋根の修復が行われたが、この修繕費の負担を減らす目的で伝建地区への指定に踏み切った。またビジターセンターは市が買い取ったものであるが、これは例外的なものであり、基本的には市民に委ねている。その中でも、主屋を修理したい市民と附属屋の修理をしたい市(行政)との課題は未だに残っている。また空き家問題は、花沢の場合すぐに地域外から空き家に移住してくる人が見つかるという。これは保存を重視する他の伝建地区と大きく異なる点である。他にも、現在は使われていない水車小屋、各所に放置された蜜柑栽培用の小型モノレールや、荒れた杉林などからも、花沢の歴史的背景と自然環境が垣間見えた。

また、この FW の折に紹介して頂いた「花沢の民俗」を読み、知識を深めた。資料では花沢の歴史について知ることができた。江戸時代中期に集落としての母体が完成し、その時点で家の数は既にほぼ飽和状態であった。その家の数は常に 30 軒前後であり、「花沢三十三軒」という言葉が現代にも残されている。三方を山に囲まれた地形で、周辺の影響を受けにくい。こういった特徴は、この場所の歴史的景観が守られてきた一つの要因ではある。しかし花沢は決して閉鎖的な性格を持っていたわけではない。海との関わりが深い焼津の町において、山という対照的な属性を持つ花沢は、山や畑で採れたものを焼津に移出する一方で、海の幸を受けとったり、帰りに買い物をしたりしていた。また、山での祭りで掲げていた御幣が漁師たちの目印となっていたり、その漁師たちが法華寺に大漁祈願をしに来たりといった相互交流も行われていた。

令和 3 年 12 月に二度目の FW を行った。歴史民俗資料館のご担当者を通して花沢に住む住民の方 4 名に対して聞き取り調査を行った。



写真 2) 花沢集落内の伝統的建造物

## 4 研究の成果

一度目の FW を行ったことで現地での詳しい情報を得ることができた。一方で自分たちの知識不足を痛感し、疑問点も浮かび、学生である自分たちだからこそできることは何かを考えるきっかけになった。それに加え、花沢の地域的特徴を考えるために、まずどのように花沢が形成されてきたのか歴史を学ぶ必要があると考えた。FW に行く前は、花沢は観光地化を目指していないため、

他の伝建地区に比べ閉ざされた空間なのではないかと考えていた。しかし空き家が生じると移住する人がすぐにやってくるなど、地域の受け入れには柔軟な印象を受け、自分達の知識とのギャップを感じた。そのため地元住民の声を聞く必要があると考えた。以下は住民の方への聞き取りの要約である。

花沢で暮らして70年になる男性にお話を伺った。花沢についてはハイキング客のおかげで賑やかになったと感じ、その交流は楽しいという。車の通行の際にはお互いの配慮が必要なことや、花沢に暮らす際には車が必須であるが、70年暮らしてきたため、もはや特に不便だと思わないという。伝建地区に選定されたことに関しては、地区内の高齢化で保存が難しいと感じていたため、伝建地区制度による保存はありがたいと感じているようだ。住民の方の中には仕事で忙しい人もいるため、現在は自分がビジターセンターの管理を行っているという。地区内の子どもの減少、高齢化は懸念しており、若い人が移住先として住んでほしいという。景観・環境保全に関しては、高齢者だけで保全を行うことは難しいと感じている。しかしハイキング客の中には、自らボランティアで登山道を整備する人もおり、そうした彼らの活動が一部の保存に貢献している。

法華寺に関わるある男性は、伝建地区に選定されたことで修復の総工費の負担を助成金で賄うことができたという。花沢の全員が伝建に賛同するためにも、法華寺を先駆けとして修復を行うことになったという。昔は資金、材料が足りなかったが、無事に補修してもらうことができたと話した。その一方で男性は、申請をしてから実際に修理が開始されるのは何年後か先になってしまうこと、また国と自治体からの補助はあるものの、場合によっては日常管理とみなされて、補助対象外になることもあると述べていた。しかし結果的に伝建地区になったことで、家屋の整備や樹木の伐採等により、花沢の風景が綺麗になっていったと喜んでいて。

花沢に移住されたある男性にもお話を伺うことができた。ここに住んで良かったと感じることは自然が豊かで人間関係が良いということだった。不便なことについては、買い物までの距離などが話題に挙がるものの、自身では総じてそれほど感じていないようだ。20年ほど空き家だった家を購入したが、外装は良い状態で残っていたという。また、ハイキング客との関係は良好で、迷惑とは考えていないと述べていた。フレンドリーな方が多いため話しかけられることも多々あるが、時折新しい顔を見ると面白いし、他地域の情報も入るのでありがたいと感じているようだ。一方、家の敷地を駐車場と勘違いして車を停める人もいるが、「花沢の住民は厳しい」と思われることを懸念して、注意ができずにいるという。

ある50代の女性にもお話を伺った。伝建地区指定による恩恵は、問題が起こった時に、行政が助けてくれることだという。自分の家さえも自分だけのものではなくするのが伝建地区だが、逆に言えば自分だけで責任を負う必要がないということでもある。何かが崩れればすぐ対応して貰えるし、不便なことは相談に乗って貰えるので、それがとても有難いのだと聞いた。花沢の将来については、下手に観光地化することなく静かに暮らしたい。何かを始めるならこの土地に住み、花沢の空気感をわかった上で取り組んで欲しいという話だった。

以上、現地での聞き取り調査により、花沢に対する住民の思いを知ることができた。交通手段は車が中心だが、住民の方はそれほど不便には感じていないように思われる。また、地域外の人々との関係は概ね良好で、ハイキング客によって整備される道もあるなど、住民の寛容性を裏付ける結果となり、且つ伝建指定への評価も総じて高いことが明らかとなった。高齢化の進行する花沢において、行政の手を借りて町並みを保存、活用することができる伝建地区制度は花沢の歴史

的景観の維持に寄与していると言える。ただし、これはあくまで4名の聞き取りからの考察であり、花沢の住民の総意ではないということには注意する必要がある。

## 5 地域への提言

今回の調査では、残念ながら十分な現地調査ができたとは言い難い。FWに関しては、花沢という中山間地域の小集落や高齢者が多いという特徴上、新型コロナ感染拡大を考慮する必要があり、FWの実施に大幅な遅れが生じた。現状ではFWは2回しか実施できておらず、そのゆえ地域への提言を取りまとめるための聞き取りデータ収集において課題が残った。実際に、2回のFWの中でも聞き取りは一度しか行えず、4名の住民に対する聞き取りしか行えなかった。一方で、地域外の人との関係性が明らかになったため、花沢を訪れる人に対する聞き取りの必要性を感じた。そして研究によって得られた情報をもとに、今後の活動の中で花沢の歴史的景観を後世に伝えられる方法と、将来的にも持続可能なまちづくりの施策を、学生という立場から模索していきたい。

## 6 地域からの評価

(焼津市生きがい・交流部文化振興課 歴史民俗資料館担当係長〔学芸員〕、鈴木源様より)

花沢地区は土産物屋が軒を連ねるような観光地ではなく一般生活の場で、住民は観光地化を望んでいない。その一方、地区内に1本しかない生活道路は人気のハイキングコースにもなっており、週末を中心に多くのハイカーが訪れる。また、重要伝統的建造物群保存地区選定後は、歴史的景観の見学を目的とした観光客が増加している。日常生活の場所でありながら、魅力的な歴史的趣きを求めて人が集まる花沢地区のまちづくりの方向性については、住民と行政で協議を継続しているが、外部からの意見を聞いてみたいという住民もいるなか、静岡文化芸術大学文明観光学コース石本ゼミのFWが行われた。コロナ禍で十分な取材も難しいなか、若い、俯瞰した視点で住民と接したFWの成果は、これからの花沢地区の保存対策事業に資するものとする。今後も住民と行政の潤滑油となるような活動の継続を期待したい。

【謝辞】本研究においては、焼津市歴史民俗資料館の学芸員鈴木源様をはじめとする職員の皆様、そして花沢集落の住民の皆様に、多大なご協力を頂戴した。ここに厚く御礼を申し上げたい。

### 【参考文献】

焼津市総務部市史編さん室編、『花沢の民俗』焼津市史民俗調査報告書，焼津市，2002年